天文学とプラネタリウム

vol. 191

www.tenpla.net

今月のお題

人と宇宙が交わる最前線

人々と宇宙の新しい関係をデザインするのは、伝統的かつ最先端のクリエイティブな仕事だと思うんですよね〜。

高梨直紘（東京大学）／平松正顕（国立天文台）

こういう話を、日本公開天文台協会の研修会でしてきました。（撮影：三浦飛未来）

最近、科学館やプラネタリウム、公開天文台などで働く方々、あるいはこれから働きたいと思っている学生さんとお話しする機会がよくあります。さまざまな理想をもって活動されている皆さんがいるからこそ、日本では天文学や星空への関心が高いのだなと改めて実感するのですが、そういう皆さんと話していて感じること。それは、そういった職場はまさに「人と宇宙が交わる最前線」なんだな、ということです。

星空や宇宙との付き合い方は人それぞれ。なにかひとつの正解があるわけではなく、いろいろな答えがありえます。ひとりの中でも、経験や環境に応じて付き合い方は変化していくこともあるでしょう。もちろん、近代科学の価値観に支えられた「天文学」もその代表的な付き合い方のひとつだとは思いますが、それが絶対的なものである道理はありません（もっとも、天プラはその天文学という切り口が好きなんですが）。人々がそれぞれに大事にしている価値観を持ち寄って、そして育んでいく。その依り代として、科学館やプラネタリウム、公開天文台には社会的な価値があると言えるでしょう。

そのように考えた時、そういった施設で働く方々でなければ担えない役割があります。それは、宇宙や星空の新しい価値を見出していくことです。それぞれの施設の特徴や地域性、そしてそこに集う人々の想いを引き受けながら、その施設にユニークな世界観を編み上げていくこと。言い換えるならば、人々と宇宙の新しい関係をデザインしそれを社会実装していくことが、そういった施設で働いている皆さんだからこそできる、とってもクリエイティブな仕事であると感じます。

例えてみれば、それは宮沢賢治のような存在かもしれません。最新の科学や伝統的な宗教観を、東北の土着性と混ぜ合わせて独自の文学世界へと昇華させた賢治のあり方は、使う素材やベースが違っていたとしても、現代に生きる私たちにも大いに参考になるものと思われます。もちろん、それぞれの施設や立場に応じたいろいろな制約もあることでしょう。やりたいことが自由にできるとも限りません。しかしながら、そういった足かせは上手にあしらいながら、それぞれにユニークな価値を生み出していくならば、きっともっと宇宙や星空が私たちに身近なものへとなっていくことでしょう。立場は違えど、天プラもそういった活動のようにありたいものです。